

1960年前後南アフリカにおけるガールガイド活動

—社会変革にむけた女性教育者の構想—

坂本舞花

はじめに

本研究の目的は、1960年前後の南アフリカにおいて、人種差別への抵抗という文脈でガールガイドがどのような役割を期待され、どのような機能を担っていたのかを明らかにすることである。本研究ではまず、当時のガールガイド活動の概要をまとめる。その上で、白人女性活動家であり教育者でもあるハンナ・スタントンの活動記録を読み解き、彼女の反人種差別に対抗する戦略の中で、ガールガイドが具体的に、いかに活用されていたのかを考える。

南アフリカでは、アパルトヘイトと呼ばれる政策によって人種差別が行われ、非白人は抑圧されてきた。南アフリカの植民地化は、1652年にオランダ人によって始まる。その後、19世紀にダイヤモンドや金が発掘されるとイギリス人が入植し、オランダ人は内陸部への移動を余儀なくされた。これはオランダ系白人に、イギリス系白人への挫折感と不満感をもたらすことにつながった。イギリス人の増加とともに、オランダ系白人は、新移民のイギリス人と自分たちを区別するために、自らをアフリカーナと呼ぶようになった。アフリカーナとはオランダ語でアフリカ生まれという意味を持つ。1948年にオランダ系住民を主な支持基盤にした国民党が単独政権を発足させ、アパルトヘイト政策が開始された。アパルトヘイトの下では、白人が社会階層の頂点に位置づけられ、他の人種（アフリカ人、カラード、インド系）に分類された人々¹⁾は政治的権利を奪われ、経済・社会生活に関わるさまざまな差別を受けた（牧野 2014）。

人種差別が徹底された社会に対し、反人種差別を掲げた活動の一つとして、ガールガイドがあげられる。国際的には、ガールガイドをガールスカウトと呼ぶ国もある²⁾。これらは一つの世界連盟に加盟をし、活動を行っている。ガールガイドは1910年に、イギリスの軍人であったロバート＝ベーデン・ポウエルの妹によってイギリスで設立された。ポウエルはこの1年前にボーイスカウトをイギリスで創設しており、当時は男子の間でスカウト活動が高い人気を集めていた。女子も同様に活動に参加したいという訴えから、ボーイスカウト創設の1年後に、ガールガイドが設立された。そして1910年にすぐさま、ポウエルによって南アフリカへガールガイドが伝えられる。当初は、南アフリカにおいて、ガールガイドは白人のみを会員としていた。しかし1936年になると、ガールガイドは、黒人を中心に類似の活動を行っていたウェイフェラーという団体と協力を図り、人種差別に対して強い反対の姿勢をとるようになった。20世紀前半、南アフリカにおいてガールガイドは白人と黒人がともに活動できる数少ない場の一つとなっていた（Stanhope 2012）。

南アフリカのアパルトヘイトに関する研究では、黒人主導の反人種差別運動について語られる

ことが多かった。教育という観点からは、黒人教師や生徒たちによる学校のボイコット運動が特に注目されてきた (Hyslop 2004)。一方、白人主導のグループがアパルトヘイトに対しどのような反対行動をとったのかについては、管見の限り注目される機会は相対的に少なかった。

さらに、南アフリカのガールガイド研究は、これまでは、活動を開始した 1910 年から 1940 年頃までを中心とした研究が多かった。ガールガイドは 1936 年に、ウェイフェラーとの統合を宣言している。つまり、これまでの研究では、統合されるまでの過程に焦点が当てられている。しかし、二つの組織が統合されたあとの状況については先行研究でも言及が少ない。白人と黒人が一つのガールガイドの組織に属してどのように活動したのかを研究することで、ガールガイドが行った人種統合の成果や意義を歴史的に評価することが可能となる。南アフリカ社会では、ガールガイドにおいて人種統合が宣言された後、1948 年にアパルトヘイト政策が開始され、極点であった 1960 年代に向かって人種隔離が徹底されていく。つまり、人種統合を目指すというガールガイドの理念と実践は、当時の南アフリカ社会の流れに逆行するものであった。アパルトヘイト政策が強化されていく社会で、ガールガイドはどのような活動を行ったのか、またその活動はどのような人々によって実践されたのか。1960 年代にガールガイドに携わった人々が、ガールガイドにどのような期待を抱いてアパルトヘイトに立ち向かったのか。これらの問いを明らかにするための前段として、本研究では、白人女性活動家であり教育者でもあるハンナ・スタントンに着目をする。

スタントンは 1956 年、南アフリカで宣教師として活動を始めた。彼女は活動を進める中で、人種による分断に対して問題意識を持ち、反アパルトヘイト運動を展開していたアフリカ民族会議 (ANC) に入党した。この ANC の理念は、南アフリカは、黒人も白人も、そこで暮らすすべての者に属する、と 1955 年に発表された自由憲章に端的に示されている。これは決して、白人に代わって黒人の権利を回復するということを意味しない。スタントンは ANC の理念に共感し、人種差別撤廃を訴え、精力的に活動を繰り広げた。彼女にとって特に、教育を通じた現地の女性のエンパワーメントは重要な活動の一端であった。スタントンの女子教育の中には、ガールガイドも有力な手段として取り入れられていた。人種間の交流を促したことを理由に、南アフリカ政府から国外追放の処分を受けた後も、スタントンはアフリカの他の国々に活動の拠点を移し、女子教育による黒人の権利保障を訴え続けた。スタントンの行動や思想を追う作業から、ガールガイドの社会変革に対する効果や教育的価値をスタントンがどのようにとらえていたのかを明らかにしたい。

以上のように、白人自身が反人種差別運動を展開する動きの中で、スタントンがガールガイドを教育に取り入れて南アフリカの社会変革を構想したことに焦点を当てる。これは、社会の支配階層の立場にある人々が、社会的に周辺化された人々の権利を積極的に保障するためにどのような戦略をとったのかを、具体的な事例の一つとして浮かび上がらせることにもつながる。

1. 研究対象と方法

研究対象とするのは、イギリス人のハンナ・スタントン (1913-1993) である。スタントンにつ

いてはこれまで、キリスト教伝道活動や社会活動家という側面に注目して描かれることが多かった。スタントンは自分自身で南アフリカの社会変革を担うのではなく、現地の女性たちをエンパワーメントし、彼女たちが主体的に変革に関わるようになることを望んでいた。スタントンの教会で教育を受けた女性たちや、スタントンの教え子から教育を受けた女性たちが、アパルトヘイト終焉の時代を生きてゆくこととなる。本研究ではスタントンの教育理念や教育実践の部分に焦点を当て、教育者としてのスタントンを描く。

方法としてはまず、先行研究のレビューに基づいて、南アフリカにおけるガールガイド活動について概括する。主として参照する先行研究は Gaitskell の“Upward All and Play the Game: The Girl Wayfarers' Association in the Transvaal 1925-1975.” (Gaitskell 1984) である。並行して Proctor の“A Separate Path: Scouting and Guiding in Interwar South Africa.” (Proctor 2000)、Stanhope の“Contested Terrain: Scouting for Girls in South Africa, 1910-1994.” (Stanhope 2012)、Parsons の“Race, Resistance, and The Boy Scout Movement in British Colonial Africa.” (Parsons 2004)、の三つを補助として用いる。南アフリカでのガールガイド活動の発展や、活動内容、教会との関係性の三つに着目し、先行研究の情報を整理する。

それに加えて、本研究の主要な分析資料として、スタントンの自伝を扱う。“Go Well, Stay Well”と名付けられたこの書籍は、1960年3月30日、刑務所での場面から始まる。250頁に渡って1956年から1960年までの、南アフリカにおける彼女の活動の記録が記されている。彼女自身が執筆し、南アフリカから帰国後の1961年出版された。入国当時の心情が南アフリカでの黒人との生活によってどのように変化したのか、何に対して問題意識を持っていたのか、解決のためにどのような手段をとったのか、また活動していた町の様子などが詳細に記載されている³⁾。本研究では“Go Well, Stay Well”の中でも特に、黒人女性を教会での労働者やソーシャルワーカーとして育てるための、教育活動について記載されている部分に着目する。そこから、スタントンにとってのガールガイドの位置づけや、ガールガイドへの期待を整理していく。

2. 南アフリカにおけるガールガイド活動の概要

本章では、南アフリカにおいてガールガイドがどのような人々へ普及していたのか、そこでは何が教えられていたのか、またそのガールガイド活動はいかなる理念を持った団体に支えられていたのか、の三つについて考える。

(1) ガールガイド活動の非白人への拡大

1910年にガールガイドが南アフリカで始まってから、白人以外も類似の活動を行うようになっていた。ガールガイドは活動開始当初、白人以外を会員と認めていなかったため、黒人やカラードの少女のための、非公式のガールガイドグループが各地で結成された。それらの団体は1925年に、ガールウェイフェロー協会として一つのグループになった。その後、黒人の少女を中心としたこの

団体はウェイフェラーと呼ばれるようになる。ウェイフェラーは英語で「旅する人」を意味する。1930 年代初頭までに、ウェイフェラーは南アフリカの 4 つの州すべてに広がり、さらに近隣のバスターランド、ベチュアナランド、ローデシア北部と南部に広がり、24,000 人が活動に参加していた。1935 年には、会員数は 30,000 人を超すようになり、1975 年には 80,000 人に達していた。南アフリカでスカウト活動が開始された当時、ボーイスカウトもガールガイドと同様に白人のみを会員としていた。ボーイスカウトの活動においても、黒人の少年のためにパスファインダーという団体が組織され、1949 年のパスファインダーの会員数は 14,885 人と記録されている (Parsons 2004:202)。1930 年代から 1940 年代、ウェイフェラーの会員数はパスファインダーの約 2 倍いた計算になり、男性に比べ女性の活動の規模は大きかったことが分かる。

当時の地域別の人口を以下の表 1 に示す。1960 年代の黒人の総人口は 9,896,000 人であった。また、1957 年までに南アフリカの都市や町の人口構成は黒人の場合、約半数を「子ども」が占めるようになっていたとされている (Parsons 2004:201)。都市や町をどのように定めるか、子どもとは何歳までを指すのかなど曖昧な部分は残るが、単純に計算すると約 5,000,000 人が 1960 年代の黒人の青少年の数であると考えられる。これらの情報から、人口の中でウェイフェラーやパスファインダーに所属していた子どもの割合は非常に高く、ガールガイドの活動が南アフリカの少女たちに広く普及していた状況が想像できる。

(表 1) 1960 年代の人口推定 (単位 : 1,000 人)

	白人	カラード	アジア系	黒人	合計
ケープ	1,050	1,282	20	2,776	5,128
ナタール	340	47	377	1,996	2,760
トランスヴァール	1,458	106	62	4,146	5,772
フリーステイト	275	15	—	978	1,268
合計	3,123	1,450	459	9,896	14,928

(Stanton 1961 を参考に著者作成)

(2) 活動内容

ウェイフェラーの活動開始当初は、ゲームと歌が重要な活動内容であった。ゲームのリーフレットが早くから指導者たちに配布され、イギリスのカントリーダンスがアフリカンダンスの代わりになるように試みられた。活動が本格化した後の内容はさらに多岐にわたる。活動の内容には、歌やゲームなどのレクリエーションの他に、三つの要素が含まれていた。それは、健康、家庭生活、産業 (農業を含む) である。ウェイフェラーの指導者のために、1926 年にガールウェイフェラー協会

が刊行したハンドブックには、三つの要素に対応して「家庭の道」、「健康の道」、「手の道」の分野があった（Gaitskell 1984:232）。

ハンドブックには、分野ごとに求められる技能も細かく記されていた。「家庭の道」の場合は、料理、台所とストーブの掃除、火をつける作業、家具や本、装飾品のほこりを払うこと、窓の清掃、害虫の駆除、居間の清掃、さらには、ドアのノックに対する返答、電話の対応などが求められた。「健康の道」については、患者のケア、包帯の使い方、火傷や失神の処置、事故への対応など、さまざまな指導が行われていた。「手の道」については、裁縫、編み物、かぎ針編みの刺繍、マットやおもちゃ作りなどの技術が求められた。

「家庭の道」「健康の道」「手の道」の他に第4の分野として「高い道」があり、通訳のテストが行われた。そのテストには言語の能力に加え、自然と交通に関する知識も求められていた。また、1932年には、聖書の知識に関連した第5の「心の道」も追加された（Gaitskell 1984:232-233）。Gaitskell（1984）は当時の指導者について、特に家庭の道を重視していたと指摘している。これは、黒人と白人の役割に関する観念が明確に分かれていたためである。黒人女性の理想像は、リーダーであることよりも、白人の下に仕える家政婦であるとされていた。

また、第5の分野によってキリスト教が強調されていることも、ガールガイドと比較した際のウエイフェラーの特徴である。ウエイフェラーのキリスト教の強調という点は、二つの団体の目的の違いからも読み取れる。ウエイフェラーの目的は、南アフリカの非ヨーロッパ系民族の少女たちを、より良いクリスチャンに育てることであった。そのために、誠実さ、従順さ、勤勉さ、礼儀正しさの習慣を学ばせ、他人や自分自身に役立つ奉仕活動や手工芸を教え、身体の発達を促し、良い主婦となり、良い子どもを育てることができるようにする、とガールウエイフェラー協会のハンドブックに定められている。これに対し、ガールガイドの活動の目的は、少女の人格を形成し、善良な市民に育てることであった。他人への忠誠心と思いやりを養い、身体の発達を促進し、公共に役立つ奉仕と、自分自身に役立つ手工芸、良い家庭を維持し正しく子育てをする方法を少女たちに学ばせるために、観察力、従順さ、自立の習慣を訓練させた（Gaitskell 1984:228）。

ウエイフェラーはガールガイドの「善良な市民」を「より良いクリスチャン」に置き換えている。ガールガイドは、単に神に対する義務を果たすことを約束するだけで、キリスト教に限定するものではない。このウエイフェラーがキリスト教を強調する傾向は、ウエイフェラーとガールガイドの差異を示す特徴の一つであると Gaitskell（1984）は指摘している。ウエイフェラーが会員をキリスト教に限定していたことは、ウエイフェラーが教会や宣教師たちによって支えられていたということが深く関係していると考えられる。次節では教会とガールガイド、ウエイフェラーとの関係を整理する。

（3）教会との関係性

ウエイフェラーのリーダーとなったのは、多くが白人の、宣教師、聖職者、学校の教師などであった（Proctor 2000:615）。ウエイフェラーとパスファインダーの組織構造はボーイスカウトとガー

ルガイドの構造を反映していた。それらの団体は、いくつかの地方の分隊で構成されており、それぞれの分隊は、1人のリーダーの下に、1人以上のサブリーダーが置かれていた。分隊の内部では、グループ長が率いる6～8人の少女のグループで分けられ、5つ程のグループが1つの分隊を形成していた (Gaitskell 1984:235)。分隊のリーダーは白人であり、サブリーダーに黒人が任命されることが多かったことも強調すべき点である。このサブリーダーとなっていたのは、学校の教師や看護師、教会で働く黒人女性であった。

1935年頃、南アフリカ全体において、女性教師の63%がウェイフェラーに、男性教師の42%がパスファインダーに参加していた (Gaitskell 1984:227)。ウェイフェラーとパスファインダーは、日曜学校の知識伝達の役割と、ガールガイドやボーイスカウトの実践的な活動の要素がそれぞれ掛け合わされたものである。1937年、南アフリカ北東部の州であるトランスヴァールの政府援助学校にいた1,729人の黒人教師のうち、648人が日曜学校でも教師として子どもたちに教えていた (Gaitskell 1984:223)。日曜学校ではキリスト教の知識を中心に教える一方で、ウェイフェラーはゲームや歌、ダンスなどのガールガイドの要素を導入し、よりレクリエーションに力を入れていた。黒人の少女たちの教会離れが、宣教師の間で懸念されていたことから、キリスト教伝道において、方向性の転換が起こっていたのである。従来の伝道方法は退屈であるとし、より人々を引き付ける方法が模索されていた。また、説教だけではなく、子どもたちの生活全体にキリスト教の精神を浸透させなければならないとされていた。そのためには、学校、仕事、ウェイフェラーやパスファインダーなどの組織、保健活動、その他多くの機関が行う活動との連携が必要であると考えられていた。

1948年にアパルトヘイト政策が実行され、バンツール教育法⁴⁾によって、政府が州や教会に代わって黒人の公教育を独占的に管理するようになるまで、黒人の教育は教会によるミッションスクールが中心であった。ウェイフェラーとパスファインダーは、ミッションスクールへ通えない子どもたちの教育機会を補う役割も期待されていた。実際に、教会やその他の社会的機関と比較して、ウェイフェラーは、学校に通っていない子どもたちのための余暇活動が十分に提供されているとして注目されていた、と Gaitskell (1984) は指摘している。学校の教師が、日曜学校やウェイフェラー、パスファインダーの指導者を兼任していたのは、このように教会やミッションスクールとの関係性が深かったためである。

1936年にガールガイドとウェイフェラーが統合されるまで、白人の宣教師は、ガールガイドが非白人の少女を会員として認めないことは、活動の指針を定めた「やくそく」の第4条と矛盾する、と訴えていた。ガールガイドの「やくそく」の第4条では、「ガイドはすべての人と友達であり、他のガイドとは姉妹です」と記されている (Stanhope 2012:107)。白人の宣教師たちは、非白人の少女たちもガイドであるという公式の承認を求め続け、ロンドンのガールガイドの本部へ抗議の手紙を送るなど精力的に活動をしていた (Stanhope 2012:109)。この他にも、アフリカーナのスカウト団体が正式に結成されたことなど、いくつかの要因から、1936年にガールガイドとウェイフェラーの統合が宣言される。これによって、ガールウェイフェラー協会の会長はガールガイド協会の

副会長となった。統合されてから九年間は、黒人のメンバーたちはウェイフェラーガイドと呼ばれていた。黒人と白人が同じ制服を着て、同じプログラムによって、同じバッジを与えられるようになったのは、1945年のことであった(Stanhope 2012:116)。黒人の少女と共に活動することについての白人ガイドの両親からの否定的な意見や、ジャーナリストによる扇情的な記事などがあり、実際の統合は困難が多くあったと考えられる。

しかしながら、スタントンが所長を務めていたトゥメロン伝道所⁵⁾では、毎週日曜日にガールガイドとウェイフェラーによる行進が合同で行われていた(Stanhope 2012:120)。1936年に二つの団体が統合を宣言したのちも、活動の拠点となったのが教会をはじめとした宗教施設であった。その中でも特に、スタントンの活動拠点であったトゥメロン伝道所は、ガールガイドとウェイフェラーがともに活動を行う中心となっていた。

3. ハンナ・スタントンの教育理念と戦略（ガールガイドの位置づけ）

本章ではスタントンが人種差別に対して何を問題だと考え、理想とする社会に近づくためにどのような戦略をとったのかについて明らかにする。またその戦略においてガールガイドはどのような役割が期待されていたのかについて考える。

スタントンはイギリスで生まれ、ロンドン大学で文学士号を取得した後、経済学部に進み、そこでも学位を取得した。その後、彼女は病院の職員として訓練を受け、リバプールとロンドンの病院で働いていた。1947年から1948年にかけて、彼女は戦後のオーストリアの避難民キャンプで活動を行う。1954年には、オックスフォード大学で神学の学位を取得した。南アフリカへは1956年8月に渡り1960年3月に逮捕されるまで、現地の教会のトゥメロン伝道所において、宣教活動を行っていた。

(1) スタントンの人種差別への問題意識

スタントンは、南アフリカにおける白人の非白人に対する優越的な態度や、白人内部でのオランダ系とイギリス系の対立の他に、黒人女性の社会的地位についても問題意識を持っていた。当時ケープタウン近郊の都市部では「黒人女性を追い出す」という政策がとられていた。非白人の移動を厳しく制限するために1952年にパス法が制定された。このパス法によって、16歳以上の非白人男性は、身分や雇用、納税の状況などを証明するパスを常時携帯しなければならなかった。1961年以降、この法律の適用範囲が非白人女性に拡大し、パスの携帯は非白人女性にも義務付けられた。また、地域法の第10条によって、都市部で18歳未満の妻と子供を同居させることができる黒人は限られていた⁶⁾。スタントンの記述によると、1955年1月から1957年7月までに4,000人以上の女性がケープタウンから追い出されたという。その後、数ヶ月の間に規制は更に強化され、1958年8月には、ケープタウンで236人の女性が通行違反で逮捕された。ケープタウンのこの当時の黒人女性の人口は約27,000人であったため、約6分の1の女性が都市部から追放されたことになる。

スタントンは、黒人女性を軽視する傾向が強められていた当時の状況を踏まえ、次のように記述している。

プレトリアの司教から突然手紙が届きました。そこには、南アフリカの教会労働者の会議の報告書からの抜粋が同封されていました。会議の参加者の一人であるコルドン夫人は、まさに私が考えていたことを強調していました。それは、教会とソーシャルワークのためにアフリカの女性を育てることの緊急の必要性でした。(Stanton 1961:103-104)

アパルトヘイト下では、白人に対して黒人が差別的な扱いによって抑圧されていた。さらにその黒人の中でも女性の社会的地位は軽視されていたと考えられる。これに対しスタントンは黒人の女性は仕事を続け、それを広げ、そしてそれを熱心に行うことができると信じていた。アフリカの女性たちの能力を簡単に封じ込めないように、教会とソーシャルワークのために訓練を実施することが喫緊の課題であると重要性を認識していた。

(2) スタントンの教育活動と理念

スタントンは生徒たちが、教会の仕事、教区での活動、社会福祉についての知識や技術を自分たちの地域に持ち帰ることができるように計画を練った。そこでは教会での教育活動が重要な戦略の一部となった。居住型の教育施設を設置し、初年度は、さまざまな地域から合わせて 5 人の学生を派遣するよう要請した。1 年間のプログラムが計画され、教育内容は講義と実習に分けられていた。午前中は講義が行われていたというスタントンの記述から、その他の時間を活用して実習が行われていたと考えられる。講義の具体的な内容は、神学（新約聖書、旧約聖書、教会史、教義）、教会での儀式や年間の行事、聖具の取り扱い方に加えて、文学や音楽、演劇の鑑賞などの文化的なものもあった。

実習の具体的な内容については次のような内容が記されている。

実習は教会と伝道部の活動に合わせて行われることになっていました。今では、堅信礼指導のための準備クラスが常にあるようになりました。実践的な活動もありました。それは、クラブ、ギルド、日曜学校、ガイド、応急処置、映写機の使用に関するアドバイス、訪問、貧しさの救済、母親たちの連合、時折、劇や実践的な仕事です。それらに加えて、生徒が経験豊富な宣教師になるために必要があると感じたものは何でもやりました (Stanton 1961:105)。

この他にもスタントンの行った実践的活動について Gaitskell (2003) は「実践的な訓練のために、さまざまな福祉プロジェクトへの遠征に出かけたり、アフリカ女性全国協議会のアフリカ問題小委員会に出席したり、プレトリアで開かれた関心のある野外会議に出席したりしていた」と説明している (Gaitskell 2003:241)

このような教育を受けた女性たちのその後の活動についても、いくつかの記録が残されている。教え子の一人であるマリー・モラテディは、スタントンが帰国した後に手紙を送った。スタントンはその手紙をいつも笑顔で読み返すという。そこには次のような内容があったという。

若い女の子を形にすることができれば、と思います。彼女たちがどれほど元気であるかを私〔マリー・モラテディ〕は知っています。そして、それがとても困難であることも知っています。しかし、私たちの生徒は責任ある有能な女性に成長するのです。彼女たちに私は多くの信用と信頼を置きます。(Stanton 1961:113) ([] 内は筆者注)

この手紙からは、スタントンの教え子の中に、女子教育に対する高い意識を持った人材が育っていたことが分かる。その女性は、現地で若年の女性に教育を与えることで、責任ある有能な女性を輩出することができると考えていた。

また、別の教え子であるエヴァ・ラマオカは訓練での知識や技術などをもとに、自身の地域へ帰ったのち、日曜学校を始めていた。スタントンは彼女の行動を高く評価している。教え子がそれぞれの地域に帰って活躍できるよう、地域でのリーダーを育てることが、スタントンの教育活動で目指されていたことであった。

彼女のとった教育活動の戦略は、彼女自身が暮らしていた町の存続に希望を持っていなかったことも関係している。彼女はレディーセルボーン⁷⁾という、白人と黒人がともに暮らす特殊な町に住んでいた。政府は、このような人種間の交流が行われている場を警戒した。実際にレディーセルボーンプレトリア市議会は、レディーセルボーンを白人の地域であると宣言し、1年以内に黒人の移動を開始すべきだという勧告を出した。スタントンは、教会の存続の危機は避けられないと考え、アフリカの女性たちへできるだけ早く知識や思いを伝えようとした。スタントンの教育活動にはキリスト教の伝道という目的はあるが、伝道活動によって一番重視されていたのは女性たちの育成であった。さらに、スタントンがその女性たちに対して期待していたことは、訓練で得た力を地域へ持ち帰り、そこで新たな女性の教育を実践することであった。このように、スタントンは女子教育に関して、自身の教育活動を出発点とし、さらなる教え子たちの活動を通して、各地にいる黒人女性たちへと活動の理念や方法が受け継がれていくことを望んでいた。

スタントンは、トゥメロン伝道所の所長の地位を受け入れることを決定した際に、「愛と歓迎と理解があり、アパルトヘイトや分離の感覚がない場所であり続けてほしいと願っている」とその当時の決意を書き留めている (Stanton 1961:36)。スタントンの、女性の存在を重視した、伝道や教育活動の根本には、アパルトヘイトによって厳格な人種差別がなされている社会を変革しようという熱意があったのである。

(3) スタントンの教育活動における、ガールガイドの位置づけ

スタントンは教会での活動を、「責任ある有能な女性」を育てるための手段として有効であると

考えていた。また、教会の活動の中では、ガールガイドは実践的な知識や技術、技能を身につける機能を担っていた。

本章の第 2 節で示したように、“*Go Well, Stay Well*”の中でガールガイドは単独で記述されず、その他の実践的な活動と並列で扱われている。ガールガイドと他の活動が並列で扱われていたという、スタントンの中でのガールガイドの位置づけは何を意味していると解釈できるのか。これまでに述べてきたように、スタントンは現地の女性を主体とした社会変革を目指し、教え子からさらに多くの女性へと、思いや知識、技術が伝わるような女子教育に期待を抱いていた。そのために設立された教育施設において、ガールガイドは実践的な活動の一つとして位置付けられていた。これは、スタントンにとってのガールガイドが、女子教育による社会変革を後押しするものの一つであったことを示す。

また、スタントンの教育活動における実習内容と、第 2 章でまとめた一般的なガールガイドの活動内容には重なり合う部分が多くある。共通する活動として、例えば応急処置や劇、地域の集会への参加などがあげられる。スタントンが取り入れていた日曜学校はウェイフェラーの前身となる活動であった。これらのことから、スタントンの行っていた実習の内容と、一般的なガールガイドの活動内容との間に、多くの共通項が見いだせる。

一般的なガールガイドの活動内容に含まれた応急処置や劇などは、スタントンの教育活動においては、ガールガイドとは別に位置づけられていた。したがって、スタントンが行っていたガールガイドは、一般的なガールガイドよりも限定的な活動に重点を置いたものであった。つまり、スタントンはガールガイドの活動内容について、一般的なガールガイドが行っていた活動の範囲よりも、狭義の意味でとらえていたと考えられる⁸⁾。翻って、スタントンの取り組みは、一般的な南アフリカのガールガイドの方法と重なり合う部分がある。このことは、組織としてのガールガイドの社会の理想像と、スタントン個人としての社会の理想像が、多くの共鳴する部分を持つことと無関係ではあるまい。

特に、スタントンは女子教育による社会変革において、「責任ある有能な女性」という言葉を用いて語ることが多い。実際に、その理念は教え子にも伝わっていた。では、ここでの「責任ある有能な女性」とは、どのような女性像を理想とし、何に対する責任を指しているのか。これらの問いへの答えについて、“*Go Well, Stay Well*”の中には具体的に示されていない。しかし、それはガールガイドの活動の目的に立ち戻ることによって想像可能となる。ガールガイドでは、少女たちを育成する際の具体的な教育内容として、公共に役立つ奉仕と自分自身に役立つ手工芸、良い家庭を維持し正しく子育てをする方法があげられていた。ここから、ガールガイドにおいて女性の活躍が望まれる場とは、家庭にとどまるものではないことが分かる。つまり、黒人女性に対する教会での教育内容に、ガールガイド活動を取り入れていたスタントンにとっても、こうしたガールガイドの方針は共有されていたと考えられる。すなわち、スタントンは、家庭のみならず地域社会に対して責任を果たすことのできる女性を理想として描いていたと解釈できる。

これらのことから、1960 年代にガールガイドに携わった人々が、ガールガイドに抱いていた期

待の一つとして次のことが言えるのではないか。それは、ガールガイドは家庭での良き妻や良き母にとどまらず、地域社会に対して責任ある有能な女性を育成するために、大きな役割を果たすことができる、ということである。南アフリカにおいてガールガイドは、社会変革を望んだ人びとから以上のような期待がなされ、アパルトヘイトに立ち向かうための一つの手段として実践されていた。

おわりに

本稿では、はじめに先行研究のレビューに基づいて、ガールガイドの変遷、活動内容、組織構造などを整理した。ガールガイドは南アフリカでの活動開始当初、白人のみを会員としていたものの、非白人の間でも類似の活動が行われていた。それらの団体は教会や学校の教師などの支援のもと、多くの少女へ普及した。子どもたちや若者を引き付けたレクリエーションに加えて、料理や掃除などを学ぶ「家庭の道」、けがの処置などを学ぶ「健康の道」、裁縫や編み物を学ぶ「手の道」が主要な三つの活動分野であった。その他にも、通訳の知識や、キリスト教の知識が活動内容に含まれていた。1936年にガールガイドは、黒人を中心としたウエイフェラーと統合し、人種差別に対して反対の姿勢を示すようになる。

統合以降、ガールガイドは何を期待され、人種差別に抵抗する戦略の中でいかに活用されてきたのか。これについてはスタントンを一つの視点として分析を試みた。スタントンは、家庭に限らず地域社会に対して責任ある有能な女性を育成し、それらの女性による社会変革を目指していた。スタントンが教会での教育の中で行っていた実習の内容と、ガールガイドの活動内容には共通する点が多くあった。このことから、1960年代、ガールガイドに携わった人々が意識していたガールガイドへの期待の一つには、アパルトヘイトに立ち向かうことのできる女性を育成するという役割があることが分かった。アフリカーナによるアパルトヘイト政策が徹底して行われていた1960年前後、ガールガイドは反人種差別思想を持った白人によって非白人も交えて実践されていた。ガールガイドの活動には、社会変革を起こし、さらには後継者の育成も担うことのできる女性のエンパワーメントが期待されていた。ガールガイドは1960年代、南アフリカにおいて白人が主導した反人種差別運動の先行事例として位置付けることができる。

社会の隅々まで人種によって分離されている状況下で、人種の統合を促すことは、社会の大きな潮流に逆らう行為である。ガールガイドのアパルトヘイトに反対する活動は、スカウト活動だからこそなせたことなのか。実のところ、ボーイスカウトは人種隔離の政策に準拠し、人種ごとに分けられた団体によって活動を継続していた、という状況があった。それでは、女性を主体とした団体であったがゆえに、社会的、政治的制約から逃れ、独自の活動を展開することができたのだろうか。ボーイスカウトもガールガイドと同様に、活動の指針を定めた「やくそく」の第4条に「スカウトはすべての人にとって友であり、他のすべてのスカウトにとって兄弟であり、他のスカウトがどのような社会階級に属しているかは関係ありません。」と記されている。人種の隔たりなくすべての人を包括しようとする第4条が、どちらの団体にも共通して記されているにも関わらず、なぜボー

イスカウトはアパルトヘイトに従い、ガールガイドは社会の圧力に屈せずに活動できたのか。本研究では、ガールガイドとボーイスカウトのアパルトヘイトに対する姿勢の違いをもたらした背景にまで迫ることはできなかった。これについては今後の課題とし検討する。南アフリカにおいて、アパルトヘイトを終焉に導く教育的取り組みの中で、ジェンダーの差異を研究に加味することで、ガールガイドが独自に果たした役割をより鮮明に描くことができると考える。

〔注〕

- 1) アフリカ人とは黒人を説明する場合に使用される。南アフリカでは、アフリカ人を表現するために使われる用語として、バンツゥ（民族）、原住民、カフィールなどがある。本稿では分かりやすさの観点から、黒人と表記することにする。カラードとは混血の子孫を指す。17世紀に移り住んだオランダ人が、女性がとても少なかったために、先住民の女性や奴隷として連れてこられたマレー系・インド系の女性と結婚した。その子孫がカラードと呼ばれる。インド系とはアジア人に含まれる。アジア人の中にはインド人の他に、中国人、マレー人などがいた。アジア人も黒人同様にしばしば差別の対象となっていた。
- 2) 「ガールスカウト」ではなく「ガールガイド」とイギリスでの発足時の名称が使われている点も興味深い。この「ガイド」は補導を意味する。戦争中、男性の補佐的な立場となる女性を育てるといった目的があったためである。このことから男性はスカウト（斥候）、女性はガイド（補導）と呼ばれていた。
- 3) この *“Go Well, Stay Well”* 以外に 1973 年に彼女はもう一冊著作を残している。この原稿には、女子学生寮「メアリー・スチュアート・ホール」の所長としてウガンダに滞在した 8 年間のことが書かれているとされるが、この本は未発表のままである。
- 4) バンツゥ教育法は 1953 年に制定され、予算や環境、教育内容の面で白人を優遇し、非白人を差別によって抑圧した法律である。
- 5) トゥメロン伝道所は、1939 年に英国国教会の後ろ盾によって、プレトリア教区の宣教開発のために設立された。現在は、伝道とコミュニティ開発に焦点を当てた NPO 団体である。
- 6) 合法的に 18 歳未満の妻と子ども同居させることができる黒人は、以下のものに限られる。(a) 生まれた時から当該都市部に継続して居住している黒人、(b) 当該都市部で 10 年間継続して一人の雇用主のもとで働き続けているか、合法的に 15 年間継続して居住している黒人、のいずれかである。
- 7) レディーセルボーンはハウテン州プレトリア地区に位置し、プレトリアの中心部から北西に約 8 キロの場所にある。
- 8) 資料の制約から、スタントンが教会での教育活動の中で行っていたガールガイドが、具体的に何を指しているかは不明である。

〔文献〕

牧野久美子 (2014) 「アパルトヘイト」日本アフリカ学会 (編) 『アフリカ学事典』株式会社昭和堂、222-223 頁。

ジョナサン・ヘイスロップ (著) 山本忠行 (訳) (2004) 『アパルトヘイト教育史』春風社。

Gaitskell, D. (1984) “Upward All and Play the Game: The Girl Wayfarers' Association in the Transvaal 1925-1975.” In: Peter, K. (Eds.) *Apartheid and Education: The Education of Black South Africans*, Johannesburg: Ravan Press, pp.222-264.

—(2003) “Apartheid, Mission and Independent Africa: from Pretoria to Kampala with Hannah Stanton.” In Stanley, B.(Eds.) *Missions, nationalism and the end of empire*, Grand Rapids, Michigan • Cambridge, UK: William B. Eerdmans Publishing, pp.237 -249.

Proctor, T. M. (2000) “A Separate Path: Scouting and Guiding in Interwar South Africa.” In: Cambridge University Press. *Comparative studies in society and history*, Vol.42, No.3, pp.605-631.

Stanhope, S. (2012) “Contested Terrain: Scouting for Girls in South Africa, 1910-1994.” In: University of Toronto Department of History. *Past Tense: Graduate Review of History*, Vol.1, No.1, pp.105-130.

Stanton, H. (1961) *Go Well, Stay Well, South Africa, August 1956 to May 1960*. London, UK: Hodder and Stoughton.

Parsons, H. T. (2004) “6 Scouting and Apartheid in Southern Africa, 1945-80.” In: Parsons, H. T. (Eds.) *Race, Resistance, and the Boy Scout Movement in British Colonial Africa*. Ohio, USA: Ohio University Press, pp.191-236.

Girl Guide Activities in South Africa around 1960
– A Woman Educator's Vision for Social Change –

SAKAMOTO Maika

The purpose of this study is to clarify what role Girl Guides was expected to play and what functions it performed in the context of countering racism in South Africa around 1960. This study brings to light one specific case of how those who are in social dominance and hierarchy positions adopted strategies to actively guarantee the rights of the marginalized.

It first summarizes the overview of Girl Guides activities at the time in South Africa based on a review of previous studies. The study then focuses on Hannah Stanton, a woman activist and educator, who envisioned social change in South Africa by incorporating Girl Guides into education. The paper analyzes the written record of her activism and consider how the Girl Guides was used in specific strategies to combat racism.

The findings are as follows.

1) Although the Girl Guides had only white members at the beginning of their activities in South Africa, similar activities were being carried out among non-whites. The popularity of Girl Guides grew with the support of churches and schoolteachers. Girl Guides provided recreational activities that attracted children and young people. The members were equipped with skills such as the "Way of the Home," where they learned to cook and clean, the "Way of Health," where they learned to treat injuries, and the "Way of the Hand," where they learned to sew and knit. In 1936, the Girl Guides integrated with the Wayfarers, a predominantly black group, and began to take a stand against racism.

2) Stanton's goal was to develop women into responsible and capable citizens not only for the family but also for the community, and to promote social change through these women. This suggests that one of the expectations of Girl Guides was that those involved in Girl Guides were aware of their role in training women to stand up against apartheid.

In summary, around 1960, when the Afrikaner apartheid policy was in full force, Girl Guides was practiced by whites with anti-racist ideology, including non-white. Girl Guides can be positioned as a precedent for the anti-racism movement led by whites in South Africa.